

育苗センター からお知らせ

育苗センターでは、本年の育苗事業を次の通り稼働いたします。
育苗予定は次の通り行いたいと思いますので関係農家の方で育苗センターでの育苗ご希望の方は、各支所、又は経済部までお申し込み下さい。

1. 硬化苗(苗を持ち帰り後、2日程度外気に慣らして、田植えをして下さい。)

← 早期苗 →								
引取時期	4/19・20	4/26・27	5/1・2	4/19・20	4/26・27	5/1・2	5/3・4	5/10・11
育苗品種	コシヒカリ	コシヒカリ	コシヒカリ	キヌヒカリ	キヌヒカリ	キヌヒカリ	キヌヒカリ	キヌヒカリ

← 普通期苗 →				
引取時期	5/24・25	5/31・6/1	5/31・6/1	6/7・8
育苗品種	キヌヒカリ	日本晴	ヒノヒカリ	ヒノヒカリ

区分\種類	早期苗	普通期苗
育苗品種	コシヒカリ・キヌヒカリ	日本晴・ヒノヒカリ
箱粒剤済単価(円)	850	800
単 価(円)	660	610

(センター渡し価格)



2. (参考標準)10a当たり25枚程度

3. 苗についての問い合わせ先

農協経済部 TEL:35-2027 育苗センター TEL:35-7311

*トマト黄化葉巻病対策について (阿波町内にも多発)

トマト黄化葉巻病はトマト黄化葉巻ウイルスの感染によって起こるウイルス病で、このウイルスはタバココナジラミのみが媒介する。その他の昆虫が媒介することはなく、経卵伝染、種子伝染、汁液伝染(人の手、ハサミ伝染はしない)、土壌伝染はしない。

1. 病徴と被害

新葉が葉の縁から黄化しながら葉巻症状となり、後に葉脈間が黄化し縮れた状態になる。さらに症状が進行すると、上位葉が小さくなり、関節が短くなり株全体が萎縮する。発病後は開花してもトマトでは果実が結実せず収穫できない。ミニトマトでは結実するが収穫量が減少する。

2. 感染防止対策

トマト黄化葉巻ウイルスに感染した植物をタバココナジラミが吸汁することによりウイルスを獲得し、新たに健全なトマトを吸汁した場合に感染し、発病する。従って、感染したトマトを除去すること、タバココナジラミを防除することが対策となる。

3. 防除薬剤(トマト・ミニトマト共通)

バスターガード粒剤	1〜2g	定植時	1回
モスピラン水溶剤	20000倍	前日	2回
バスターガード水溶剤	10000〜20000倍	前日	3回
スタークル顆粒水溶剤	20000〜30000倍	前日	2回
コロマイト乳剤	15000倍	前日	2回
マッチ乳剤	20000倍	前日	3回

コルト顆粒水和剤	40000倍	前日	3回
※オレート液剤	1000倍	前日	1回
※粘着くん液剤	1000倍	前日	6回
※サンクリスタル	3000倍	前日	6回

注1. ※印の薬剤は、強日光の時に使用すると薬害が出る恐れがあるので避ける。

*暖房機器の重油低コスト対策について

1. 暖房機器の点検整備の徹底

○暖房器具のバーナノズルの燃焼カス等による汚れは、燃料と空気の正常な混合を阻害し、完全燃焼を妨げたり燃焼効率の低下を招くことになるので、燃焼室内の掃除やノズルの交換等を行う。

2. 温室内の環境改善(放熱抑制)

○ハウス周辺に防風ネットを設置する。
○周壁部や谷部の二重被覆資材の隙間の点検・補修をする。

3. 適切な温湿度管理

○循環扇の設置及び活用による湿度の均一化に努める。
○温度センサーを適切な位置に設置する。
○作物及び品種別の温度特性を踏まえた上で、生育ステージに合わせた最適暖房温度の設定等の温度管理に努める。

ただし、省エネばかりに気を取られていると、日照不足・高温障害や炭酸ガス不足を招くことがあるので、換気には十分注意する。

***ミニトマト管理について**

1. 温度管理

○ハウス内の温度管理は、日中は目標25〜30℃、夜間は最低10〜12℃を確保する。
 (追肥やかん水をしたときは、13〜15℃を確保する。)

○保温は、二重被覆(カーテン)のみでは多湿になり、疫病、葉かび病などが多発する。11月中旬頃(最低気温が10℃を下回る頃)から暖房機を回し、湿度を下げる。

2. かん水、追肥

○草勢やほ場条件、土壌水分状態を勘案してかん水する。

かん水が多い：葉が大きく、軟弱となる。
 (窒素肥料の吸収が多くなる↓病気が発生しやすい。)

かん水が少ない：生育が遅れる。

(石灰の吸収が少なくなり、尻ぐされ等が増える。)

※一度に多量のかん水を行うと裂果が多くなる。

○追肥は草勢により異なるが、第1果房の収穫期頃から始める。

(1回当たりの施用量は、10a当たりチツソ成分で1〜2kg程度とする。)

※草勢が弱い場合は、メリット青400倍液を葉面散布し、樹勢の回復に努める。

3. 摘芽、摘果、摘葉

○摘芽、摘果、摘葉は、晴天時に行う。

○5段果房開花期以降は、展開葉16〜17枚程度を残し、順次下葉からこまめに摘葉し、通風、透光をよくする。

4. ホルモン処理

○ホルモン剤は1花房中に4〜5花開花したときに処理し、1花房当たり3〜4回処理する。処理間隔の目安は、9月3〜4日、10月と春先7日、11月以降7〜10日。ホルモン剤は生長点や新葉にかからないように注意する。

○ホルモン剤の濃度は低温期には濃く、高温期には薄くする。

(12月中旬〜2月下旬 トマトトーン100倍液程度。)

※マルハナバチの利用(使用には飼養許可が必要)
 4mm目以下の防虫ネットを設置し、第1花房が咲きそろった頃に放飼する。正常な活動温度は5〜25℃、寿命は2ヶ月程度。

5. 裂果対策

○適正な土壌水分管理に努める。

○急激な土壌水分の変化は裂果を招く。

○換気に留意し、ハウス内の湿度を低く保つ。

○降雨後の収穫はできるだけさける。

○ハウス内の温度は、10℃以下にしない。(露滴が果実に付着し裂果の原因となる)

○ちぎり遅れは、裂果の原因となるので、適期収穫に努める。

6. 病害虫防除

① 灰かび病

ハウス栽培では、11月〜4月にかけて発生しやすい。密植や軟弱徒長の生育で発生を促進する。

低温にならないように、保温に努め、日中高湿時に換気に努める。

カンタスドライフロアブル

1000〜1500倍 前日/3回

ベルコート水和剤

6000倍 前日/2回

フルピカフロアブル

2000〜3000倍 前日/4回

アフエットフロアブル

2000倍 前日/3回

② 葉かび病

葉かび病菌は、20〜25℃、湿度95%以上の多湿を好む。下葉に現れ、しだいに上葉に広がる。十分な換気を行う。

トリフミン水和剤

3000〜5000倍 前日/5回

ベルコート水和剤

6000倍 前日/3回

ゲッター水和剤

1500倍 前日/3回

アフエットフロアブル

2000倍 前日/3回

③ 疫病

20℃くらいの低温多湿の条件が続くと発生しやすい。葉や果実に多く発生する。下葉から発生し、しだいに上葉に広がる。

ランマンフロアブル

1000〜2000倍 前日/4回

ペンコゼブフロアブル

1000倍 前日/2回

ドイツボルドーA

500倍 1/1

④ マメハモグリバエ

施設栽培では、1年中発生を繰り返す。1世代の所要日数は15℃で約50日。成虫は、体長2mm程度のハエ。

アフアーム乳剤

2000倍 前日/5回

ダントツ水溶剤

2000倍 前日/3回

プレバゾンフロアブル

2000倍 前日/3回

※マイネックスの利用

放飼適期：黄色トラップにマメハモグリバエ成虫が1頭でも誘殺されるか、成虫の摂食痕(白い点々)が認められたら、翌週に寄生蜂を放飼する。

寄生蜂の寿命は1週間程度であるので、1週間に1回の放飼を3〜4回行う。
1瓶/10a

*夏秋ナス栽培について

阿波町の夏秋ナスは徳島県内の約3分の1を生産する代表産地となっております。産地を維持する為に土づくり等の準備を早めに行いましょう。

☆土壌条件

排水性のよい耕土の深い圃場が理想である。

☆土づくり

10a当たり稲ワラ500〜800kgと石灰窒素60kgまたは堆肥3000kgを2月下旬迄に施し深耕する。

なす台木品種の病害抵抗性と栽培特性

	青枯病	半枯病	半身萎凋病	草勢	適性	栽培特性	
①	アカナス	×~△	○	×	中	ハウス露地	栽培しやすく品質も良い。
	ミート	△	○	○	中	露地	アカナス程度の低温伸長性、栽培しやすい。
②	台太郎	○	○	×	中	露地	発芽や初期生育早く接ぎ木が容易。 青枯病や半枯病に強い。低温伸長性はアカナスに劣るため、無理な早播きを避ける。
	トルバム	△~○	○	△~○	強	露地ハウス	発芽や初期成育がおそい。耐暑性や耐湿性は強い。アカナスより根群が多く、吸肥力が強い。苦土欠乏がやすい。
	トレロ	○		○	強	露地ハウス	
	トナシム	○	○	○	やや強	ハウス露地	

注) ○…抵抗性 △…かなりの抵抗性 ×…罹病性

土壌病害被害と台木品種の選び方

- 定植時期の活着不良による枯死でなければ、青枯病や半身萎凋病の被害が疑われる。
次回作では連作を避け、これまでナス科を作付けていないか、数年以上休作している畑を選ぶ。
- どうしても前年に被害を受けた畑に連作せざるをえない時は、アカナスなど①を利用していたらば、次回作ではより抵抗性の強い②の品種から台木を選んだ方がよい。
- ②は最も抵抗性が強いので、これらの品種でも被害を受けたならば、絶対に連作を避けるべきである。

(3) 病害抵抗性の台木品種利用だけで被害を防ぐことは不可能であり、土づくりによって土壌微生物相の改善を図り、過剰な追肥を控え、夏場の地温低下などの耕種的な防除方法を取り入れることが大切である。

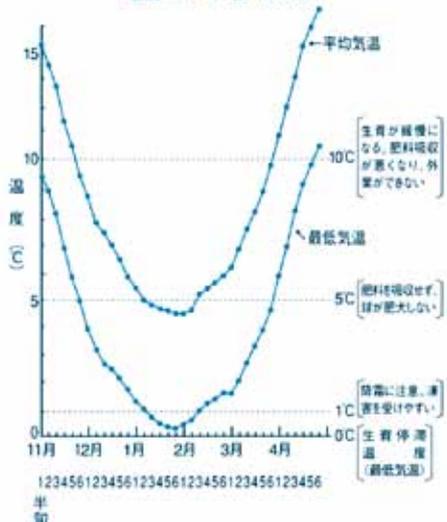
*レタス栽培管理について

◎レタスの当面の管理について

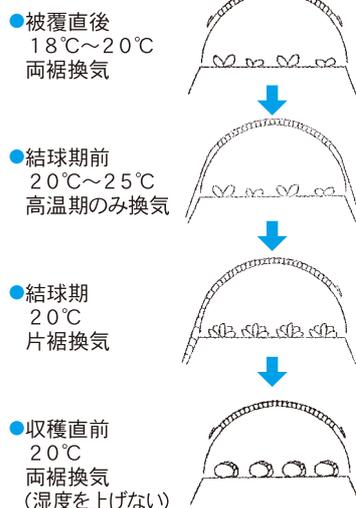
- 定植後15日は、根と外葉を十分育てる。
- 冬場乾燥すると小玉のまま固くなるので、適宜かんな水を行う。
- 生育適温 結球開始期以前まで 25℃以下
(外葉12〜15枚で結球が始まる)
球肥大充実期まで 20〜22℃
結球期 20℃以下
(やや低めの温度管理)

※最高気温が25℃以上の高温になると過大軟球、タケノコ球等の変形球が出やすい。

第1図 レタスの生育と温度域
温度のデータは香川県のもの



トンネル管理図



1. 被ふく開始時期

生育適温が15〜25℃と、涼しい環境を好む。被覆による高温条件で生育を進めることよりも、霜による凍害を防ぎ、低温での生育の遅れや停止を防ぐために行う。

トンネル被覆始めは、平均気温10℃を目安として、それ以上の高温に戻らない12月に入り、一度霜にあつてから行うのが一般的。

2. 換気の基本

2月頃でも、日中晴天のときにはトンネル内は午前9時過ぎには30℃以上となる。

したがって天気の良い日には、朝の早い時間からトンネルの南や東側を何か所か大きく開放し、日中の適温状態を保つようにする。また、午後には少し早めから閉めて、夜中までの温度をなるべく保つようにする。

特に、結球開始前7日頃に、数日間の高温にあうと「結球異常」が出やすくなるので、「結球開始期の株」に対する被覆は注意が必要。徹底した換気に努めることが大切。

◎病害虫防除について

3. 病害虫防除について

①斑点細菌病

発病条件：冬季から早春にかけて発生し、気温の高い時期は少ない。
曇雨天が続くと急速に拡大する。↓低温多湿条件で発生しやすい？

病気の症状：葉縁の近くに単黒褐色の不正形の病斑を生じ、次第に拡大してV字形に大きく枯れ込む。外葉及び結球外葉に発生が多く内球に発生することは少ない。

◎耕種的防除

- ①マルチ栽培を行って、土壌からの病原菌のはね上がりをできるだけ少なくする。
- ②トンネル栽培はできるだけ換気につとめる。
- ③圃場の排水をよくする。
- ④連作を避ける。
- ⑤収穫後できるだけ被害葉を圃場から搬出する。
- ⑥低温期の降雨後の発生が多くなる傾向にあるので防除の徹底を図る。

②軟腐病

発病条件：多雨多湿の時に多い、土壌伝染で病原細菌はレタスの損傷部分から侵入して感染し発病す

る。

病気の症状：葉や茎の外観は異常がないのに株全体に生氣がなく、葉がしおれ、茎のずい部だけが腐敗、空洞化し、悪臭を発する。

◎耕種的防除

- ①発病地ではイネ科作物と輪作する。
- ②石灰を十分に施す。
- ③排水を良くする。
- ④外葉に傷をつけたり土を付着させないようにする。

1. 主要病害虫の発生時期

病害虫名	11			12			1			2			3			4	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中
灰色かび病菌 核病																	
斑点細菌病 腐敗病 軟腐病																	
すそ枯病																	
アブラムシ ヨトウムシ																	
ナモグリハエ																	

高温時降雨後の発生が多いので防除を徹底する。

③腐敗病

発病条件：冬から春どりのトンネル栽培に発生する。凍霜害による傷み、トンネル内の高温多湿条件が助長する。

病気の症状：結球を始める頃から収穫期に、結球外葉の葉縁や凍霜害を受けた部分から褐変し、次第

に拡大する。

◎耕種的防除

- ①連作を避ける。
- ②トンネルかけは早めに行い、なるべく雨に直接あてない。
- ③排水を図り、高畦にする。
- ④発病増加の恐れのある場合は、早めに収穫する。
- ⑤結球始期前後に細菌が付着しやすいため、この時期の防除を徹底する。

④すそ枯病

発病条件：育苗期と結球期に発生が多い。土壌が多湿の時。感染は育苗期に多い。

病気の症状：地ぎわの葉柄に褐色の病斑を生じ、次第に拡大して葉全体に拡がり地ぎわが腐敗して枯れる。生育初期に発生すると苗立枯となる。

◎耕種的防除

- ①マルチ栽培をする。
- ②圃場の排水を良くし、高畦にする。
- ③連作の回避、株元の通風を図る。多窒素型栽培を避ける。

⑤灰色かび病

発病条件：やや低温で多湿条件で発生が多く、凍霜害の傷口や下葉の老化葉から侵入。

病気の症状：地面に接する最下葉の葉柄葉身に水浸状の病斑が現れ表面の灰色のかびと多量の胞子を生ずる。

◎耕種的防除

- ①マルチ栽培をする。
- ②発病株は早めに除去する。
- ③下葉の老化葉を除去し通風を図ると発病は少ない。

◎防除上の注意

- ①冬どりレタスでは近紫外線除去フィルムで被覆すると被害軽減ができる。
- ②結球をはじめとする15〜20日前頃から防除する。

③ 11月から翌年3〜4月までの間に雨が続いて多湿になると急激に発生する。

⑥ 菌核病

発病条件：やや低温で多湿条件下で発生が多く、20℃以上では発生が抑制される。

病気の症状：株元の葉柄から水浸状のアメ色の病斑を生じ真白いかびが生える。

その後のかびは固まり黒い核になる。株は地ぎわから腐敗し枯れる。

対 策：灰色かび病と同時に防除できる。

⑦ ペト病

○ 耕種的防除

① 施設やトンネルでは通風換気を充分に行い灌水はなるべく控える。

② マルチを行い、マルチの下にかん水チューブを配置して、施設内の多湿化を防止する。

③ 定植時には苗を選別して発病苗を植えない、本圃での発病株は早めに取り除く。

⑧ アブラムシ類（モザイク病）

○ 耕種的防除

寒冷紗被覆、光反射フィルム等を活用して、アブラムシ類の飛来を防止する。

⑨ オオタバコガ

（生態）

オオタバコガは、レタスをはじめトマト・なす・ピーマンなど様々な作物を食害する。年間4〜5回発生して、卵は1卵ずつ産み付けるために、ほ場の広範囲に被害が発生する。近年、年内どり作型での被害が目立っています。

（被害状況）

幼虫が作物内に潜り込む性質を持っているため、薬剤がかかり難く、さらに中齢期以降の幼虫は薬剤抵抗性が強くなるために、難防除害虫とされています。

（防除のポイント）

幼虫が、レタス内に入ってしまう前に、殺虫剤による防除を行います。

新しい食害痕や虫フンを見つけたら、その周囲に必ず幼虫がいるので、注意深く寄生の有無を調べます。

⑩ ハスモンヨトウ

（発生状況等）

ふ化後1週間は群生し、その後分散し、被害が拡大する。夜行性である。

広食性なので付近の雑草地からも侵入する。

（防除のポイント）

幼虫ができるだけ小さいとき（1cm以下）の時に防除する。

葉裏についている黄褐色の卵の固まりをつぶす。性フェロモンを設置して早期発見に努める。

⑪ ナモグリバエ

（被害状況）

例年では3月中旬以降に発生する「ナモグリバエ（ナモグリ）」が、暖冬の影響によって発生が目立っている。今までは、下葉に寄生する程度であったが、発生が早くなり、密度が高くなると、商品価値にも影響がでる。

（防除のポイント）

ほ場でのナモグリバエの発生は、苗による持ち込みによるので、育苗中の防除と、定植時の粒剤殺虫剤の施用、3月上旬からの発生初期からの農薬防除を行います。

* 各種作業機貸し出しについて

農協では、農作業の省力化をはかるために、各種作業機の貸し出しを行っていますので希望者は販売課へ申し込んで下さい。

10 a 当たりの作業料金

○ ナス畦立機

9,000円 オペレーター有

ナス畦立機

3,000円 オペレーター無

○ レタスマルチャー

3,000円

○ レタス（移植機）

3,000円

○ ブロッコリー畦立機

3,000円

○ ブロッコリー（移植機）

3,000円

○ 動力噴霧器

1,000円

